みんなの只見線

「おかえりなさい、と感謝のきもちで」

只見線地域コーディネーター　酒井（さかい）　治子（はるこ）

豪雨災害の後、只見駅に再び列車が走ってきたのは、二〇一二年十月一日でした。その日は、早朝に只見町からバスで魚沼市に行き、只見駅へと向かう列車に乗ってお祝いしてくれる人、只見駅でお迎えを待つたくさんの人がいました。再開通記念メダルも用意され、皆で再開を祝いました。

只見駅に一本も列車が来なかった一年二カ月の間、駅で仕事をしていると様々な人が訪れました。水害で被害を受けた只見町の様子を心配してきてくれた方、なぜ橋や道路が壊れているのか知らないで聞いてくる方と話をしながら、誰も降りてこないホームを毎日見ていました。

只見駅に再び列車が入ってきたときは自分でも驚くほど感動しました。毎日列車が来ることを当たり前だと思っていたけれど、当たり前ではなく、何事もなく無事に過ごせていたことも当たり前ではなかったのだと。奥会津が豪雨災害に見舞われる四か月前には、福島県は東日本大震災と原発事故によって、住むところも、耕し受け継がれてきた田畑を失い、当たり前につづくと思っていた明日を奪われた人が大勢いたこと。その時に、毎日走ってきてくれる列車に感謝をして手をふろう、と誰とはなしにはじまったのが列車のお見送りです。

一日三本の只見―小出の列車が出発するときには、スタッフが外に出てお見送りすることがはじまりました。時にはお見送りに間に合わなかったり、雪が多すぎて列車の音に気付かなかったり、電話を受けながら見送ったり。最初はふり返してもらえなかったのですが、徐々に列車のお客様も手をふり返してくれ、駅に訪れていた方も一緒になってお見送りをするようになりました。スタッフがお見送りにぴったりな演歌調のハッピを作ってくれ、お客様も私たちもそろいのハッピを着て、出発するときには「いってらっしゃい」と、到着する列車には「おかえりなさい」の気持ちを込めて手をふっていました。

これが契機となり、魚沼市が平成二十七年三月に「只見線に手をふろう条例」を制定しました。通勤や通学時、農作業中や散歩のときなどに只見線を見かけたら手をふろう、という内容です。沿線五町村（只見町・金山町・昭和村・三島町・柳津町）でも条例が制定され、おもてなしの気持ちを表す「只見線に手をふろう」は続けられています。

JR只見線はこの災害をきっかけに全国各地に知られるようになりましたが、その歴史は古く、会津線としてはじまった会津若松―会津坂下の区間は、四年後の二〇二六年に開通百周年、小出―大白川は今年で開通八十周年を迎えます。それぞれの区間は時代ごとにその敷設目的が異なり、戦争で中断されるなどして、田子倉ダム工事の専用鉄道を編入したことで一本の只見線へとつながりました。私たちの先祖が熱望し、懇願してできた鉄道ですが、時代の変化と共に利便性が低くなった只見線は住民の暮らしとは少しずつ離れ、走っていても止まっていても気にならない存在になっていたのかもしれません。

災害を経なければ省みることができなかった、先人が築いてきた土地の歴史を知り、当たり前の日々を暮らせることへの感謝の思いを忘れてはいけないと思います。